

# クローズアップ

## ペンシルベニア大学国際関係プログラム

マイケル・ジェイ・フリードマン



Frank Plantan

ペンシルベニア大学国際関係プログラムの学生、(左から)リビア・ルラース・ハイゲンス、モハメド・アルアリ、マシュー・フリッシュ。

米国の一流大学のひとつであるペンシルベニア大学の国際関係プログラムは、国際問題に関心のある学生に、それぞれの目標に沿った研究に従事する機会を与えるとともに、国内外の実業界、政府、学界その他の分野でキャリアを積むための教育を行う、学際的なプログラムである。マイケル・ジェイ・フリードマンは、米国国務省国際情報プログラム局専属ライターである。

米国の大学の学部生は、通常2年目の終わりまでに「専攻」分野を決める。経済、政治、文化の国際化が増すに従い、フィラデルフィア市にあるペンシルベニア大学では、「国際関係論」が最も人気のある専攻科目のひとつとなっている。国際関係論は、学際的なプログラムであり、学生は多くの異なる分野の科目を履修し、担当指導教官の下で30～40ページの卒業論文を執筆しなければならない。

国際関係論を専攻するための基準は厳しい。希望者は、成績評価点が4.0点中2.8点以上で、政治学、西洋文明、ミクロ経済学、

およびマクロ経済学の必修科目を履修していなければならない。国際関係論専攻を認められた学生は、国際関係理論、国際経済、外交史、および国際政治学を中心とする必修科目を履修する。また、人文科学部およびウォートン・スクール・オブ・ビジネスの科目の中から選択科目として認められている科目を選ぶ。これによって、学生は、東アジア研究から人類学、そして国際金融まで、さまざまなテーマに合わせた研究を行うことができる。また、このように幅広い選択肢があるため、国際関係論専攻の学生は、「ダブル・メジャー」といって、国際関係論に加え、歴史、政治学、経済学などの分野で、同時に2つの学位を取得することも多い。

国際関係論専攻の学生はそれぞれ、各自選んだ国際関係関連のテーマで卒業論文を書く。最近卒論に取り上げられたテーマを見ると、「2国間関係における歴史的記憶の役割 - 日本と中国、および日本と韓国の関係」から「多国籍企業が国際取引法にもたらす課題」まで、多岐にわたっている。

カナダのトロント市出身の4年生マシュー・フリッシュが国際関係論を専攻した理由は、幅広い科目を探究して「知識基盤を多様化する」ことができるからである。フリッシュは、同大学のアンバーグ・スクール・オブ・コミュニケーションで取った選択科目の講座を高く評価している。「コミュニケーションと大統領職」というその講座では、自分の選んだ大統領図書館を訪問するための研究補助金を各学生に与えた。フリッシュは、ボストン市にあるジョン・F・ケネディ図書館・博物館を訪れ、ケネディの冷戦政策と公民権政策の相互作用に関するゼミ・レポートのための調査を行った。そのレポートは後に、学生が発行するペン・ヒストリー・レビュー誌で発表された。

米国とクウェートの二重国籍を持ち、国際関係論と経済学をダブル・メジャーで専攻する3年生のモハメド・アルアリは、国際関係論を学ぶことは、自分が持つ2つの文化と環境の「ギャップを埋める」ことに役立つ、と言う。米国とベルギーの二重国籍を持つ学生で、国際関係論とフランス語のダブル・メジャーのリビア・ルラス・ハイゲンスは、家族が政治亡命者として米国に来た。国際難民法に関わる仕事をを目指す彼女にとっては、国際関係論が最も適した専攻であるという。

国際関係論専攻の学生は、さまざまな学術、社会、および職業訓練活動に参加することができる。その多くは、学生の運営する国際関係論専攻学部生協会(IRUSA)が後援している。IRUSAの現会長ルラス・ハイゲンスによると、毎年IRUSAの援助を受けて学生がニューヨーク市とワシントンDCを訪れ、法律および国際関係論の有名大学院の教授陣と交流している。

ペンシルベニア大学の国際関係論専攻の卒業生は、多くの分野で活躍している。国際関係論プログラムのフランク・プランタン共同ディレクターは、「国際問題に関する知識を持つとともに、研究、執筆、その他世界の変化を評価するための技能を備えた人々に対する需要は大きい。官民学の各界で、また国内外のさまざまな分野で、こうした人たちが必要とされている」と言う。

---

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

## 米国の大学認定制度について

「大学認定制度とは、大学および高等教育プログラムの品質保証と質的向上を目的に、各教育機関およびプログラムを厳しく調査する、外部審査プロセスである。米国の大学認定制度は、100年以上の歴史を持ち、もともとは公衆の衛生と安全を守り、公共の利益に資するために作られたものである。

米国では、大学認定制度は、この目的のために設置された民間の非営利組織によって実施されている。外部の組織による高等教育の評価には、政府は関わっていない。他国では、大学の認定および品質保証活動は、通常、政府が実施している。(中略)

認定機関は、米国50州の大学のほか、多くの外国の大学を審査する。また、法律、医学、ビジネス、看護学、社会福祉、薬学、芸術、ジャーナリズムなど、幅広い職業や専門分野にわたる何千ものプログラムも審査する。」

上記の文書によると、認定機関には、地域、全国、および特定の専門職種担当の3種類がある。認定制度の目的は、品質の保証、連邦政府の補助金取得に係る資格審査、学校間の編入を容易にすること、そして教育機関が授与する学位や免許に対する雇用者の信頼を高めることである。

[[HTTP://WWW.CHEA.ORG/PDF/OVERVIEW\\_US\\_ACCRED\\_8-03.PDF](http://www.chea.org/pdf/overview_us_accred_8-03.pdf)]

高等教育基準認定協議会会長

ジュディス・S・イトン

# 留学生が見つけた新しい故郷とグローバルな目的

リチャード・ホールデン



Tom Strickland

アフガニスタンのジャワド・ジョヤとケニアのイベット・イサーが、インディアナ州リッチモンド市のアールハム大学に留学したのは、クエーカー教徒の教義に基づく奉仕と行動主義を重視する同大学の方針に魅力を感じたからである。

インディアナ州リッチモンド市のアールハム大学は、クエーカー（キリスト友会）的秩序の中で最も質の高い教育を提供することを目指す、独立系教養大学（リベラルアーツ・カレッジ）である。学習と真実を尊重することを重視し、学生たちに、在学中も卒業後も、行動的で探求心旺盛な学習者となるとともに、知的な探求に加えて、国際教育、紛争の平和的解決、個人の平等、そして個人の行動に関する高い道徳基準を重視する生活を送ることを奨励している。リチャード・ホールデンは、アールハム大学元広報担当ディレクターである。

アールハム大学の留学生は、1人残らず将来へのビジョンを持っていると言ってよい。この小さな教養大学には、激動する世界に、公正かつ平和的な解決策をもたらすことを目指す学生たちが集まってくる。そして、その大半は、卒業を待たずに、世界の問題に取り組んでいる。そうした強い衝動を強く感じている留学生に、アフガニスタンのジャワド・セペリ・ジョヤと、ケニアのイベット・イサーがいる。2人とも、すでに、学業で得た専門知識を、世界各地の社会・政治問題の解決に役立てる多くの方法を見つけている。

留学生は、母国で行われている不正を見た個人的な体験から、活動に打ち込むことが多い。ジャワドは、克服しがたいと思われる状況も、希望と勤勉によって乗り越えることができることを示す、生きた手本である。無学で貧しいシーア派イスラム教徒の家庭に生まれ、小児まひのため車いす生活となったジャワドは、1990年代後半、混乱するカブール市で暮らしており、将来の見通しは暗かった。タリバン政権は、教育全般を抑制しようとしたが、特に女子や身体障害者の教育を妨げた。しかし、赤十字の施設で働いていたイタリア人医師が、ジャワドの才能を見出し、ひそかに彼に家庭教師を付けた。ジャワドは、すぐに外国語やコンピューター技術を習得した。そして、13歳になるころには、赤十字の施設でプログラマーとして働き、充実した将来の生活を思い描くようになっていた。

このイタリア人医師、そして2002年にタリバン政権崩壊後に出会ったイタリア人ジャーナリストとの間で友情を育んだことで、ジャワドは戦争で荒廃したアフガニスタンを逃れ、イタリアのトリエステ市にある学校に入学することになった。そこで国際バカロレア（大学入学）資格を目指しながら、米国とカナダの大学に

願書を提出した結果、アールハム大学を含むレベルが高いいくつかの大学に、全額給付の奨学金付きで入学を認められた。

「ここに来ることができて、こんなにうれしいことはありません。大きな大学に比べると、ここでは、自分の信念に沿った研究がしやすいと思います」と、ジャワドは満面の笑みをたたえて言う。アールハム大学で2年目を迎えているジャワドは、科学を中心に、人文・社会科学系の講座も取っている。「自分の経験から、自然主義的な観点から平和を研究することに興味を持つようになりました。生物学では、同種間の競争という問題があります。人間もそうした種のひとつですから、私は、この問題を別の角度から検証しています。つまり、われわれが人間らしい方法で競争をするにはどうすればよいかを探求しています」と、ジャワドは説明する。彼は、大学院でもこのテーマで研究を続け、いずれは大学、財団、あるいはシンクタンクに勤務したいと考えている。

キャンパス内の課外活動や親睦活動にも常に積極的なジャワドは、模擬国連、平和と国際研究クラブ、アムネスティ・インターナショナル、およびアジア人学生連合に参加している。また、奨学金を補うために、アールハム大学の「平和と国際研究(PAGS)プログラム」の有給インターンとなり、PAGSカリキュラムの効果を高める方法について研究をしている。

昨夏、彼は、全米の大学から選ばれた40人の代表の1人として、カリフォルニア州スタンフォード市のスタンフォード大学で開催された日米会議に出席し、その後、カリフォルニア州フレモント市に本部を置く北米アフガニスタン人専門職者協会です仕事をしました。「キャンパス、地域社会、そして世界各地における和平と正義を探求する活動に貢献した」活動により、ジャワドは今年、全米平和正義協会の最高学生賞を受賞した。また、インディアナ州ゴーシェン市のゴーシェン大学で行われたブラウシェアズ学生平和会議でも、同様の賞を授与された。

アフガニスタン、イタリア、そして米国での経験を持つ20歳のジャワドは、自らを「地球市民」と呼び、「今私に必要なのは、グローバルビザだけです」と言う。

イベット・イサーは、アールハム大学で国際関係論を専攻する3年生である。彼女は、この大学のクエーカーの伝統と、「非暴力、質素、社会正義」という理念に共鳴した。インド人の両親を持つイベットは、ケニアのナイロビ市で生まれ育った。「私には祖国が2つあると思っていますが、どちらかというインドの方に親近感を感じます」とイベットは言う。彼女は、「初めて（アールハムに）来たときは、中西部の小さな町の生活はつらいだろうと思いました」と認めたらうで「でも、実際には素晴らしいところでした。この大学のコミュニティーはすばらしく、周りも責任感の強い人たちばかりです」と付け加えた。

イベットは、アールハム大学で、「知識に基づく民主主義を支持するアメリカ人(AID)」という組織の支部を作った。A

IDは、世界各地の大学生がビデオ会議で国際的な問題を直接話し合い、その解決策についてコンセンサスを取る場を提供している。今日、学生が運営するAID支部は、米国内、外国を合わせて70カ所におよぶ。「AIDの合宿に参加し、外国について米国の一般市民にもっとうまく伝えるにはどうすればいいか、そして同時に外国の人たちが平均的なアメリカ人と触れ合う機会を増やすにはどうすればいいか、ということについて素晴らしいアイデアを持つ人たちに会ったことがきっかけでした」

イベットは今年、4つの会議を企画し、米国の学生たちが、パキスタン、オーストラリア、フィリピン、ホンデュラス、スリランカなど多くの外国の学生と接触する機会を作っている。こうした会議で、学生たちは、「自然災害へのグローバルな対応」、「米国は海外で民主主義を追求すべきか」といったテーマで議論した。

ジャワドと同様に、イベットも模擬国連に深く関わっており、昨年はシカゴ市で行われた模擬国連の地域会議に、レバノン代表として出席した。「これは、他人の立場に立って、他国の国益を代表するのですが、それだけではなく、外国の人たちと協力して作業を進め、世界の利益のために譲歩することを学ぶためのものです」とイベットは言う。

このほかにもイベットは、アールハム大学合唱団の一員として、音楽も楽しんでいる。昨春は、同大学の「ウィーンでの合唱体験学期」に参加した。「ヨーロッパの中心へ行って、荘厳な大聖堂で歌うのは、信じられないほどの素晴らしい体験でした。決して忘れることのない体験です」と、イベットは語る。

米国の大学で学んだ最も重要な教訓は何かという質問に対して、彼女は、考え深げに天井を見つめながら、このように答えた。「それは、地域社会が、個人にとって最も重要なもののひとつであるということです。他の人たちとのつながりや愛がなければ、人は不幸な状況にある孤島にすぎません。人はお互いに助け合い、隣人の世話をすべきである、ということを私は学びました。そんなことは前から分かっていたのかもしれませんが、本当に学んだのは米国に来てからです。」

---

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

# 社会奉仕

ロビン・L・イエーガー



Rogelio Solis, AP/WWP

ミシシッピ州ジャクソン市で建設中の非営利団体「ハビタット・フォー・ヒューマニティ」の住宅の完成を急ぐ南ミシシッピ大学とイリノイ大学の学生たち

本稿では、米国国務省国際情報プログラム局専属ライターのロビン・イエーガーが、米国の大学がどのように学生に地域社会への奉仕を奨励しているかを説明する。

米国には、ボランティア活動の強い伝統がある。若者は、小さいときから、地域社会に貢献する方法を見つけるように言われる。全米各地の大学では、学生がボランティアの奉仕活動に参加する機会を提供している。ボランティア活動によって大学の単位を取得できる場合もあるが、誰かを助けること、そして若い自分も役に立てると自覚することによる満足感が、唯一のご褒美である場合が多い。この概念を具体化しているのが「キャンパス・コンパクト」である。そのウェブサイト (<http://www.compact.org>) によると、この組織は、「およそ500万人の学生を代表する950校以上の大学の学長で構成される全国的な連合で、高等教育における社会奉仕、市民参加、およびサービラーニング（奉仕学習）の促進を追求している」

ミシシッピ州ハティスバーグ市にある南ミシシッピ大学の社会奉仕学習室(OCSL)は、1992年の設置以来、同大学のコミュニティーに属するすべての人々にとって、社会奉仕とサービラー

ニングのボランティア資料センターおよびサービス拠点として機能している。地域社会およびキャンパスでの奉仕に費やされる時間は、年間2万時間を超える。このプログラムは、優秀な学業成績、地域社会のための奉仕、そして学生自身の成功を基本としており、地域、全米および世界的なレベルで学生が奉仕活動に参加することを奨励している。南ミシシッピ大学は、現在東ミシガン大学と提携して大学でのサービラーニングのモデルを改定しようとしている高等教育機関6校のうちの1校である。また、ミシシッピ州地域社会・市民参加センターのホスト機関でもある (<http://www.usm.edu/ocsl>)。

イリノイ州アバナシャンペーン校は、サービラーニングについて、以下のように説明している。

一般教育の大きな目的のひとつは、社会の一員として責任を負えるよう、学生たちを教育することである。そのための手段のひとつとして、本学では、学生による社会参加を授業での体験と関連付けている。一般教育は、学生が知性と社会性の両面で、楽しみながらも責任ある態度を身に付けられるよう、これを支援するものである。さまざまな発想をあれこれ吟味し、異なる世界を想



Ted S. Warren, AP/WWP

ワシントン州シアトル市にあるシアトル大学のキャンパスで主催されたホームレスのためのテント村で、聴覚障害を持つホームレスにアメリカ手話を教える同大学の学生。

像し、無意識の思考習慣に抵抗することを楽しみ、基本的な世俗的つながりという責任を負うのである。

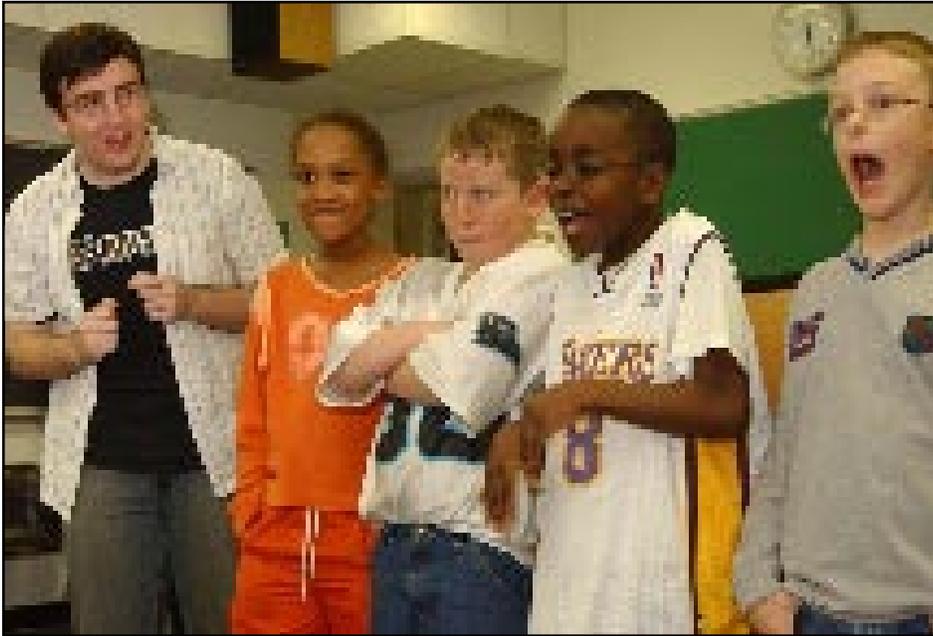
公共活動への参加を通じて、本学の学生たちを社会と関係付けることが極めて重要なのは、そのためである。一例を挙げると、建築デザインスタジオの学生たちは、2学期間にわたって、非営利団体ハビタット・フォー・ヒューマンティのために、低コストでエネルギー効率の高い住宅を設計する、という課題に挑戦した。低所得層の家庭でも買えるような住宅を作る一方で、高度な技術を使って省エネを実現するという市民としての責任に根差した、一連の複雑な価値観や選択肢が原動力となって、このユニークな住宅を建設するにいたった。(http://www.union.uiuc.edu/ovp/sle/)

ニューイングランド地方では、ダートマス大学、バーモント大学、セントマイケルズ大学、ノーウィッチ大学、シャンプレン大学およびキャッスルトン州立大学が、さまざまな地方政府機関および非政府機関と提携して、「レクリエーション・教育・冒険・指導教育による指導(DREAM)」という制度を作り、低所得地域の子どもたちに長期的な助言者を提供している。DREAMは、1999年にダートマス大学で始まり、現在は州内各地に施設を持

ち、多くの地域社会の子どもたちを支援している。この制度は、青少年育成と地域開発の原則、長期的な助言者との週に1度の定期会合、そして旅行、スポーツ、サマーキャンプ、スポーツ界のヒーローや地域の指導者との交流などのレクリエーションを取り入れている。提携先には、住宅局、ガールスカウト、ベン・アンド・ジェリーズ・アイスクリーム社などがある。(http://www.dreamprogram.org/)

ワシントン州シアトル市のシアトル大学は、2005年11月、ホームレス問題に関する全国会議を主催した。シアトル大学が、この年次会議の第5回会合の主催者となるよう依頼されたのは、同大学が2005年2月に「テントシティ3」という、ホームレスの男女100人のための移動テント村を1カ月にわたり主催した実績による。シアトル大学は、このような形でホームレス社会を受け入れた初めての大学となった。シアトルで行われた全国会議は、シアトル大学の学生たち、および高等教育における市民としての責任を振興するために結成された、州の大学学長連合であるワシントン州キャンパス・コンパクトのメンバーが準備した。この会議について詳しくは、http://www.studentsagainsthunger.orgを参照。

全国的に知られるサービスマニエール課程のひとつに、サウス



サウスカロライナ州で子どもたちに演技の指導をするウォフォード大学の学生。

写真提供 Wofford College

カロライナ州グリーンビル市のファーマン大学のプログラムがある。同大学のウェブサイトが提供する入学希望者向けの情報によると、

「本学では、宗教、教育、芸術、哲学、社会学、政治学などの多くの授業で、カリキュラムにサービスラーニングを取り入れている。恵まれない環境にいる子どもたちに読むことを教えたり、地元の非営利組織のためにマーケティング・イベントを企画したり、あるいは起業家の事業計画作成を助けるなど、学生は多くの授業のなかで、地域社会での活動に従事することができる」

サービスラーニングの機会、クラスの外にも豊富にある。ファーマン大学では、毎年800人の学生が、学生が運営するマックス・アンド・トルード・ヘラー大学生教育奉仕部隊にボランティアとして参加し、救世軍、マイヤー特殊教育児童センター、ヒスパニック・アフケアーズ、ガールスカウトなど、グリーンビル市の45の機関を支援している (<http://www.furman.edu/main/community.htm>)。

グリーンビルに近いサウスカロライナ州スパータンバーグ市のウォフォード大学にも、サービスラーニング・プログラムがある。この小さな教養大学では、学生が直接、または地元の機関・組織を通じて、ボランティア活動をしている。個人のボランティアとして活動する学生もいれば、大学のクラブや友愛会など、キャンパス・グループの仲間とともに参加する学生もいる。ウォフォードの学生たちは、スーベキッチン（貧しい人々のための食事を作り、提供する場所）やホームレス収容施設で奉仕活動をしている。また、地元の学校で教えたり、無料診療所で働いたりす

る。貧しい子どもたちにクリスマス・プレゼントを配ったり、キャンパスや地域社会の美化運動に参加したりする学生もいる。

(<http://www.wofford.edu/serviceLearning/default.asp>)

あらゆる種類の大学が、サービスラーニング・プログラムを提供している。全米コミュニティカレッジ協会によると、米国のコミュニティカレッジの半数以上が、ある程度のサービスラーニングを教科課程に取り入れている。同協会は、サービスラーニングに関する刊行物を多数発行しているが、特に、*Sustaining Service Learning: The Role of Chief Academic Officers*（全8ページ）および

*A Practical Guide for Integrating Civic Responsibility Into the Curriculum*（全86ページ）の2冊が興味深い。いずれも[http://www.aacc.nche.edu/Content/NavigationMenu/ResourceCenter/Projects\\_Partnerships/Current/HorizonsServiceLearningProject/Publications/Publications.htm](http://www.aacc.nche.edu/Content/NavigationMenu/ResourceCenter/Projects_Partnerships/Current/HorizonsServiceLearningProject/Publications/Publications.htm)で閲覧可能である。

ニューメキシコ州のアルバカーキ職業技術大学(ATVI)は、優れたサービスラーニングを実施しているコミュニティカレッジの好例である。同大学は、全米・地域サービス公社の補助金を受けているほか、1999年全国ベルヴェザ賞および全国コミュニティカレッジ地域参加センターの2004年サービスラーニング・市民参加賞を受賞している。同大学の学生は、50を超える地元機関で、子どもたちのための各種プログラム、医療サービス、社会奉仕・法律サービス、森林業務、スペシャルオリンピック、議員事務所2カ所、動物愛護協会などから選んで奉仕活動を行うことができる。(<http://planet.tvi.cc.nm.us/experientiallearning/>)

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。

# 7つのスナップショット： 教育機会の実例

米国の大使館・領事館は、相互理解を深めるための教育・文化プログラムの企画と運営など業務のさまざまな側面を支援してもらうために、外国籍の職員を雇用している。2005年4月、米国国務省は、研修のために、外国人職員18人を米国に招いた。彼らは、研修の一環として、ノースカロライナ州シャーロット市内および周辺の大学数校を訪問し、留学生のキャンパス体験を観察した。本稿では、この研修グループの報告を概説し、米国におけるさまざまな教育機会を紹介する。

ノースカロライナ州シャーロット市が選ばれたのは、同市が米国南東部における、金融、マスコミ、ビジネス、文化、交通の中心のひとつであるとともに、高く評価されている教育機関が多数存在するためである。18人の参加者はいくつかのチームに分かれ、それぞれがひとつの大学キャンパスを訪れて、学生と交流し、授業を見学し、学生が利用できる設備や直面する課題について話し合い、留学生の体験を肌で感じる事ができた。訪問先の大学は、いずれも留学生の勧誘に極めて熱心であり、最新の使いやすいウェブサイトを持っています。留学生に情報を提供している。外国人学生を対象とした情報提供の典型的な例として、デービッドソン大学のウェブサイトを以下に抜粋する。

国際意識と、グローバルな問題に関心を持つことは、デービッドソン大学における教育の重要な要素である。国際的な環境で暮らし、学んできた学生として、皆さんは本校のコミュニティーに属する人々と共有できるものをたくさん持っている。私たちは、願書提出手続きを通じて、皆さんと、皆さんの体験について、より多くのことを知りたいと願っている。

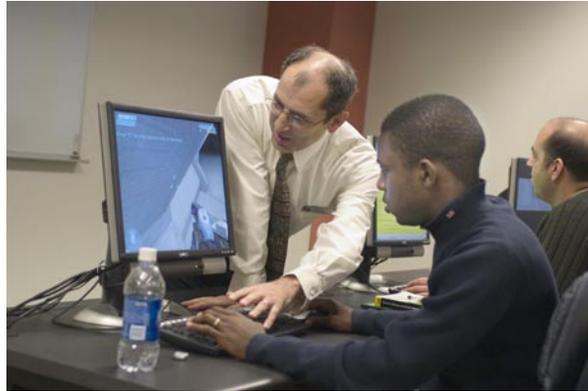
## 7つの大学



写真提供 Belmont Abbey College

**ベルモント・アビー大学**は、学生数1000人の小規模な教養大学で、「家族的」な環境と、知性・肉体・精神という三拍子そろった人間形成を追求することで知られている。ノースカロライナ州シャーロット市から西へ数分のベルモント市にあり、ベネディクト修道院であるベルモント・アビーに付属している。(http://www.belmontabbeycollege.edu/)

セントラル・ピードモント・コミュニティーカレッジ(CPCC)は、ノースカロライナ州最大のコミュニティーカレッジである。7万人以上の学生が数カ所のキャンパスに分かれ、100以上の課程で学んでいる。ジョージ・W・ブッシュ大統領は2005年4月5日、労働力開発計画を発表する場として、CPCCを選んだ。100カ国を優に超える国々からの留学生がCPCCで学んでいる。(http://www.cpcc.edu)



写真提供 Central Piedmont Community College

CPCCのコンピューターの授業で学生を指導する教授。



写真提供 Davidson College

デービッドソン大学では、毎月ひとつの国を取り上げて、食事の際にその国の料理、音楽、装飾を取り入れるプログラムを始めた。写真は、パンを焼くボランティアの学生たち。

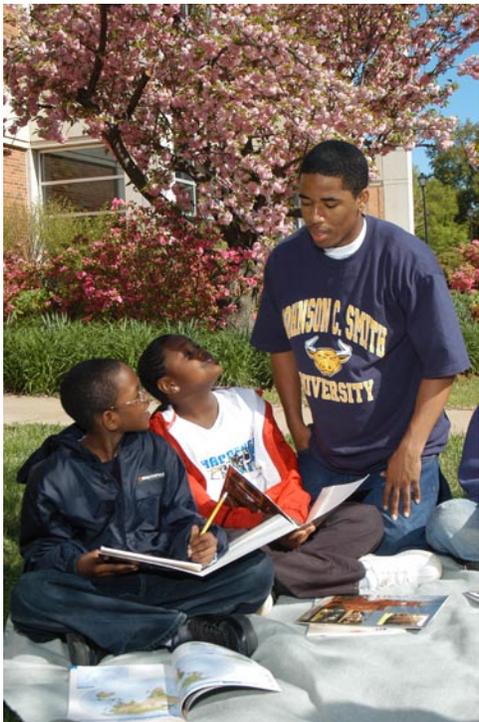
ジョンソン・アンド・ウェールズ大学は「米国を代表する職業大学」を自任している。4州にキャンパスを持ち、そのうちのひとつ、シャーロット・キャンパスは2004年に開設された。同大学は、経営学、接客業（ホテル・レストラン）、および調理の各分野で、準学士号（2年制）と学士号（4年制）を授与している。同大学のウェブサイトは、17カ国語で提供されている。(http://www.jwu.edu/charlotte)

デービッドソン大学は、シャーロットから北へ30分ほどのところに位置するデービッドソン市（人口8000人）にある。独立系の教養大学で、学生数は1600人である。1837年に長老派の信徒によって創設された同大学は、23人のローズ奨学生を輩出している。デービッドソン大学卒業生で国務長官を務めたディーン・ラスクを記念して、20年前に設立されたディーン・ラスク国際研究課程をはじめ、優れた教科課程が多数ある。同大学は、男子校として創設されたが、今日では学生の男女比率は半々である。(http://www.davidson.edu)



Victoria Arocho, AP/WWP

「全米パン・サミット」で、パンの飾り付けをするジョンソン・アンド・ウェールズ大学の学生。



写真提供 Johnson C. Smith University

ジョンソン・C・スミス大学のサービスマンシップ・プログラムでは、学生が個人指導を必要とする地元の子どもたちとペアを組み、土曜日のサタデー・アカデミーで勉強を教える。このプログラムによって、算数や読解テストの点が低かった多くの子どもたちが、州の平均点を上回る成績を取めるようになっている。

ジョンソン・C・スミス大学は、伝統的黒人大学である。シャーロット市の中心部からわずか1マイルの広大な全寮制のキャンパスで、1400人の学生が、打ち解けた雰囲気の中で、熱心で親切な教職員の指導により刺激を受け、成長している。同大学では、卒業の条件として、社会奉仕を義務付けている。また、9カ国への海外留学制度と、90社以上の企業と提携したインターンシップなどの実践教育体験を提供している。(http://www.jcsu.edu/)



クイーンズ大学の卒業式。

写真提供 Queens University of Charlotte

シャーロット・クイーンズ大学は、女子神学校として設立された。今日では、長老派教会に付属する、修士課程を持つこの私立総合大学に在籍する学部生のおよそ30%が男子である。同大学は、シャーロットの美しい住宅地域にあり、一般教養のコアプログラムと、24の専攻科目から選択できる学部課程プログラムがある。学生数は約2200人で、生徒と教授の比率は13対1である。(http://www.queens.edu/)

ノースカロライナ大学シャーロット校(UNCC)には1万9500人以上が在籍しており、学士号、修士号、博士号を授与している。シャーロット市の中心部から約10マイル離れた近代的なキャンパスは、重要な地域ビジネスと研究の中心となっている。UNCCには、全米各地および80カ国から、学生が集まっている。(http://www.uncc.edu/)

キャンパスの名物となっている「たたき上げの人」の像をバックに記念撮影をするUNCCの学生たち。



Wade Bruton/UNC Charlotte

## 調査結果

**入学許可と願書の提出。** 入学許可の基準は大学によって異なる。デービッドソン大学とクイーンズ大学は、いずれも入学の条件が非常に厳しいと自任している。ベルモント・アビー大学は、学力と精神的な発達を重視するが、ジョンソン・C・スミス大学は、成績だけでなく、学生の人格や性格にも注目する。セントラル・ピードモント・コミュニティーカレッジでは、ほぼ誰でも自分に合った教科課程を見つけることができるが、誰もがすべての課程に合うわけではない。最も大きい2つの大学ノースカロライナ大学シャーロット校とセントラル・ピードモントは、いずれも学生が利用できる設備が充実しているが、大学の規模が大きいため、多少威圧感を感じさせる。自分に合った大学を探すことが、願書提出の手続きにおいても、入学後の学生の成績や満足感においても、極めて重要であることは間違いない。どの大学にも、入学許可や奨学金に関する情報を掲載したウェブサイトがあり、ほとんどの場合、留学生向けの詳しい情報も提供している。

**居住施設、食事、各種設備、医療、保安。** セントラル・ピードモント以外の各大学は、キャンパスに学生寮があり、入居申請に関する情報を提供している。食事や住居の形態は、大学によって異なるが、通常、特に2年目以降はさまざまな選択肢がある。どの大学にも図書館があり、学生の使えるコンピューターがある。また、キャンパスの安全に関する情報も提供している。どの大学でも、学生は健康保険に加入していなければならないが、大学の提供する医療サービスがある。大学生活に適應するためのサポートが必要な学生のためには、カウンセリングも行われている。費用や方針は、大学によって異なる。学期の日程も、大学によって、また年度によって異なるため、入学予定者は、各大学のウェブサイトなどで、授業の日程、書類の提出期限、休日などを調べる必要がある。

**学業支援。** 英語や文章の書き方の個人指導を行っている大学もある。また、通常、図書館では、資料の使い方やリサーチの方法を教えてくれる。どの大学でも、就職フェアへの参加など、卒業後の就職支援を行っている。

**留学生のためのサービスや組織。** 留学生や、国際関係に関心のあるアメリカ人・留学生の交流のためにイベントを企画する事務局や、協会、クラブなどがある。民族的あるいは地理的な共通項を持つ学生たちの組織が多数ある大学もある。留学生を、地元の学生や家族に紹介し、特に休暇を共に過ごすようにする制度を設けているところもある。シャーロットの非営利組織インターナショナル・ハウスのように、複数の大学の留学生が所属し、市内の他の留学生と交流するための組織もある。

**宗教。** 国務省の職員からは、宗教に関する質問も出たが、留学生も、留学生のアドバイザーも、学生は、信仰している宗教にかかわらず、すべてのキャンパスで歓迎され、尊重されることを

強調した。これは、公立大学でも私立大学でも、また宗教系大学でも同様である。

## 結論

参加した国務省職員たちは、短期間の訪問であったが、それまでに読んだり聞いたりしていたことを実地に観察し、理解を深めることができたと感じた。彼らが学んだ最も重要な点は、米国で学習するにはさまざまな、すばらしい方法がある、ということであった。

寄稿者(写真下) -- Mohamed Ahmed Abdalla Ahmed (カタル、ドーハ)、Vivian Abdallah (エルサレム)、Paraskevi Vivien Allimonos (オーストラリア、メルボルン)、Nada A. Al-Soze (イラク、バグダッド)、Majka Brzostek (ポーランド、クラクフ)、Borie Bendezu-Velez (ペルー、リマ)、Josita Ekouevi-Amavi (トーゴ、ロメ)、Alejandra Escobosa (メキシコ、エルモシロ)、Usawadee Katpichai (タイ、バンコク)、Pamela Kuwali (マラウイ、リロングウェ)、Ratna Mukherjee (インド、チェンナイ)、Maria Paola Pierini (イタリア、ローマ)、Dana Polcikova (スロバキア、ブラチスラバ)、Karin Rosnizek (ドイツ、ミュンヘン)、Luisa Maria Viau (グアテマラ、グアテマラ市)、Beatrice GP Vilain (ハイチ、ポルトープランス)、Cornelia Vlaicu (ルーマニア、ブカレスト)、Zhou Hong (中国、広州)



Robert Kaiser/U.S. Department of State

本稿に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解あるいは政策を反映するものではない。